



目

標

と

俺

数年前のある日、俺は目標を立てた。

それはもう偉大な人生の目標だ。

俺はその目標を見つめ「よし頑張るぞ!」と思い思い今迄やってきたわけだが、どうにもこうにもヤツに近づけないでいた。

普通、目標というのは立ち止まっていて、それに向かって全速力する、というのが正しいあり方だろう。少なくとも俺はそう思っている。いや、そう思っていた。

ところがどうだ、アイツときたらちょっと違うらしいのだ。

目標のヤロウ、俺と同じ時速で走りやがる。

それだから俺は、走っても走っても走ってもまるでアイツに近づかないのだ。俺がメロスだったらセリヌンティウスはとっくの昔に死んでるぜと言いたい。

くそう、目標のヤツめ。

今に見てろ。

どうにかこうにかお前に近づいてみせるぞ。

いや、それどころかお前を捕まえてみせるんだからな。

俺はめげなかった。

めげずに颯爽と走った。

時折「大丈夫か？」と誰かが顔を覗き込んできても、目標のヤツを捕まえるために俺はその言葉さえも振りきって、必死で必死で全力疾走してやった。

するとどうだ。

今迄ヤツの背中がぼんやり同じ大きさにしか見えなかったのが、だんだんとその背中がはっきりくっきりでっかくなっていく。これはつまり、俺とヤツとの距離が縮まっているということだ。

ようし、この調子だ。

この調子でいけばアイツを捕まえることができるぞ。

俺は大きく手を振り上げて走る。アイツも大きく手を振り上げて走っていたが、俺の方が少しばかり早い。

このままいけばアイツを捕まえられそうだ。

よし、良いぞ。良いぞ良いぞ、この調子だ。

そら、手を伸ばして—————捕まえてやる！

「何やってんだ！パスパス！」

俺が捕まえようとした瞬間、ヤツは唐突にそんなことを言い出した。

俺は何のことだか分からずに思わず「は？」と聞き返していた。

と、ヤツはいかにも急いでいますといった具合に手をこまねきして、早くバトンを寄こせ、遅れちまう、と言った。

バトンって何だ？

俺は首をかしげる。

「おい、お前が手に握ってるやつだよ。バトンを寄こせ、俺がアンカーなんだから。早くしないと他のやつに追い抜かされちまうだろ」

「あ、ああ。そうか。悪い悪い」

気づいたら俺の手の中にはバトンがあり、俺はとっさに小学校の時の運動会を思い出した。そういえばいつだったかの運動会でも、こうしてアンカーにバトンを渡したことがあったのだったか。

俺は手の中のバトンを慌ててヤツに渡した。

ヤツはそれをしっかりと受け取り、よし、あとは任せておけ、と捨て台詞のようなものを残して走り去っていった。

俺はヤツの後ろ姿を見ながら、頼んだぞ、と心の中で小さく呟いた。

ヤツの背中が段々と小さくなっていく。

俺の望みを託した背中は今やちっぽけで……、

—————いや、ちょっと待て。

違う。

これは違う、違うぞ。

俺とアイツとは同じチームの走者でもなんでもない。むしろ警察と泥棒との関係の方がしっくりくるくらいの話だ。俺は追っているんだ。俺は捕まえずに逃げたいのだ。あいつに希望を託して立ち止まっている場合じゃないのだ。

嗚呼、何をやっているんだ俺は！

俺はまんまとアイツにのせられたのだ、もう少しで捕まえられるところだったのに！

あいつはしてやったりと思ったに違いない。

このままでは悔しい。あんまりにも悔しすぎる。

俺は走った。颯爽と走った。

時折「少し休んだら？」と誰かが声をかけてきても、目標のヤツを捕まえるために俺はその言葉さえも振りきって、必死で必死で全力疾走してやった。

するとどうだ。

またしてもヤツの背中がぼんやりと見えてきたではないか。これはつまり、リベンジの時が近づいてきたということである。

俺はより一層走りに磨きをかけた。もうこれでもかというくらいにスピードアップした。しかしヤツも同じようにスピードアップしているらしく、その距離はなかなか縮まらない。

俺はその縮まらない距離に少々苛々としていた。

距離が一定に保たれれば保たれるほど、あの時の失態が後悔されるというものである。

そんな傷心の俺に向かって、遠くにいるアイツがくる、っと振りかえった。
俺とアイツとの距離は大分ある。
アイツの表情なんて見えないくらいの距離だ。
しかしそれでも、その時の俺にはしっかりと見えたのだ。そして聞こえたのだ。
—————あっかんべーをしたアイツの姿が。

「べろべろべ〜っだ。悔しかったら捕まえてみな」

ヤツは、あっかんべーだけでは飽き足らず、お尻をペンペンするという古典的手法まで使ってきた。嗚呼、何たるヤツだ。人を馬鹿にするにも程がある。
そうして憎たらしい目標のヤツは、俺を上回る時速で走り去っていったのだった。

END